

## 【論文】

# 先史奄美のヤコウガイ消費

## ——ヤコウガイ大量出土遺跡の理解にむけて——

木 下 尚 子

**Discussion on Shell Consumption.**  
**Based on archaeological sites with large amounts of excavated shells**  
**of Great Green Turban Snails in prehistoric Amami.**

Naoko KINOSHITA

## 要旨

縄文時代中期から古代における奄美大島のヤコウガイ消費の変遷を、出土したヤコウガイの計測にもとづいて復元し、変遷に三つの画期を見だして以下をのべた。

- ・ 奄美大島北部において、先史時代人は殻径17.1~19.0cmの大型ヤコウガイを捕獲対象にしていた。
- ・ 兼久式期前半（6~7世紀）に、あらゆる大きさのヤコウガイの大量捕獲と殻の集積が始まる（第一の画期）。その背景に島外における貝殻消費が想定されるものの、遺跡にのこされた大量の貝殻はその供給の効率の悪さを示唆する。
- ・ 兼久式期の後半（8世紀頃）にヤコウガイの大きさは全体に著しく小型化し、ヤコウガイ資源の委縮した状況が認められる。（第二の画期）
- ・ 兼久式期の終末期（9~10世紀）にはヤコウガイ資源が回復する。当期は大和で南島のヤコウガイ消費が始まる時期であり、産地としてこれに対応していた可能性が高い（第三の画期）。
- ・ 奄美大島の11世紀・13世紀の文化層にはヤコウガイがほとんど検出されていない。この時期は大和におけるヤコウガイ大量消費の最盛期である。古代・中世のヤコウガイ交易の実態を、生産地においてさらに検討する必要がある。

キーワード：奄美大島、ヤコウガイ、先史時代、古代、大量出土遺跡、下山田Ⅱ遺跡、宇宿小学校構内遺跡、マツノト遺跡、小湊フワガネク遺跡、用見崎遺跡、先山遺跡、安良川遺跡、長浜金久Ⅰ遺跡

## はじめに

ヤコウガイ〔夜光貝 *Turbo (Turbo) marmoratus* Linnaeus, 1758〕は、サザエの仲間分類される大型の巻貝で、最大の個体では径（殻径）が23cmに及ぶ。これらは種子島以南の暖かい海にひろく生息し、多くはサンゴ礁の外面に面した波当たりの強い斜面に棲むので、その捕獲は容易ではない。ヤコウガイの貝殻は厚く、内部に真珠光沢をもつことが特徴で、蓋は厚く円い（奥谷2000 p.95、山口1995 p.66、中山2000、渡久地2009）。湾曲した貝殻は容器への加工がたやすいため、先史時代の早い頃

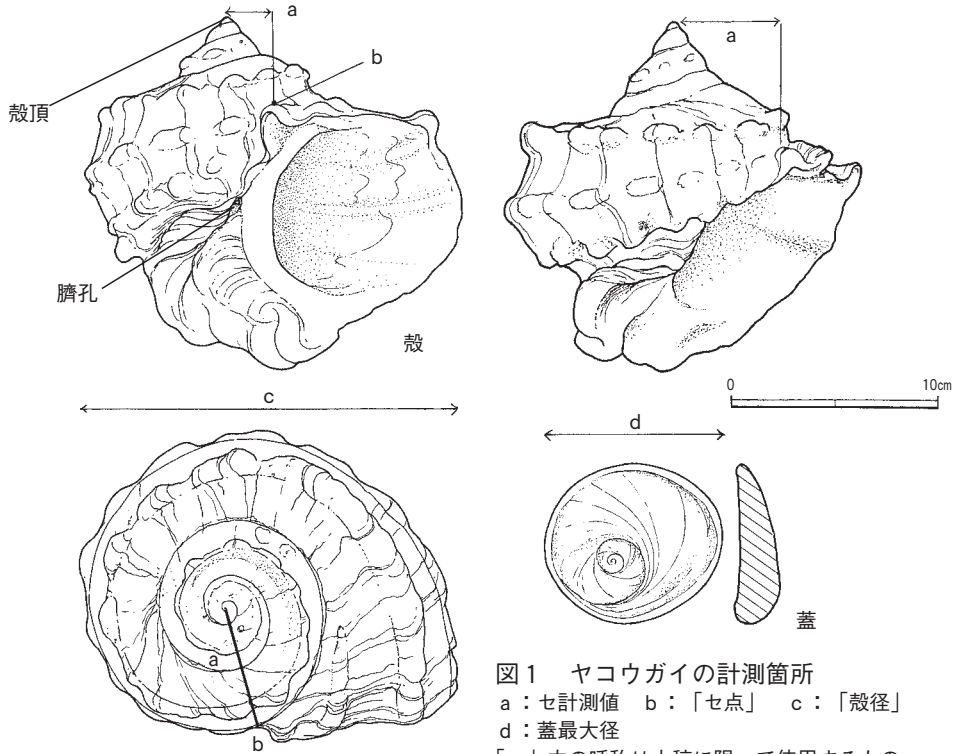


図1 ヤコウガイの計測箇所  
 a：セ計測値 b：「セ点」 c：「殻径」  
 d：蓋最大径  
 「」内の呼称は本稿に限って使用するもの。

から頻繁に捕獲されてきた<sup>(1)</sup>。ヤコウガイは肉量が多く美味である。

1990年代、奄美大島北部においてヤコウガイをきわだって多くのこす7世紀前後の遺跡の発見が相次いだ。こうした特徴をもつ遺跡はやがてヤコウガイ大量出土遺跡として明示的に取り上げられ（高梨1998）、この現象が何を示すのかについて歴史学的・考古学的な検討が始まり、現在も複数の検討が継続している（高梨2006、木下2007、田中2008）。わたしは出土ヤコウガイをもとにした消費実態の復元がこの現象の理解につながると考えて、残存する貝殻を計測する作業を進めている（木下2006など）。今回はヤコウガイ大量出土遺跡の前後の時期を含めたやや長い時間の中でヤコウガイ消費の動向を整理し、ヤコウガイ大量出土遺跡の意味を検討した。

## 1. ヤコウガイ消費の復元作業

遺跡で出土したヤコウガイから当時の消費状況を復元するために、以下の作業をおこなった。

- ① 遺跡出土のヤコウガイの個体数を、殻と蓋からそれぞれ数える。
- ② ヤコウガイの大きさを測る。完全な形の場合はその最大径を計り、殻が破片の場合は一定の部位を決めその残存部の大きさから本体の大きさを割り出す。蓋も同様にして本体の大きさを求める。
- ③ 得られた殻の復元径を大きさごとに分けた頻度分布グラフを作成し、蓋から復元された分布と殻から復元された分布を比較する。

以下、個体数の数え方と大きさの復元方法について具体的に説明しよう（図1）。

### 1. 1. 個体数の数え方

貝殻では以下の二つの条件をともに満たす個体を1個とした。

i : 殻頂と臍孔をもつ・殻頂だけをもつ・臍孔だけをもつ、のどれか。

ii : もっとも外側の体層端部が殻口上端で一つ奥の体層に接する部分（以下セ点<sup>(2)</sup>）をもつ<sup>(3)</sup>。

i では一つの個体が殻頂と臍孔に分かれて割れた場合、2個体に数えられてしまうが、ii のセ点は同一個体のどちらかにしか伴わないので、i と ii がともに備わった個体を1個体と認めた。

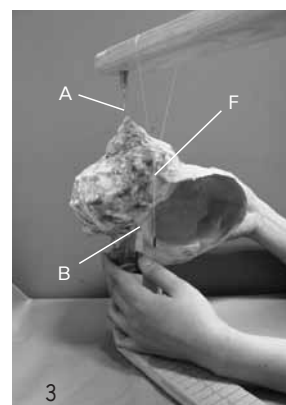
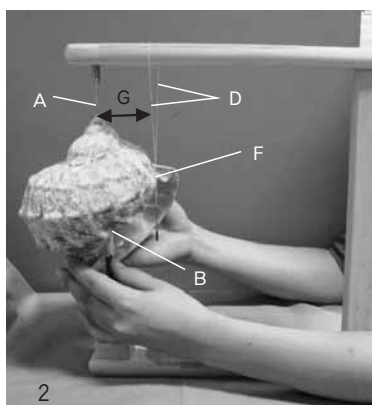
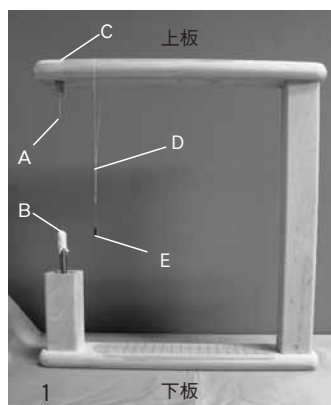
蓋では、内面にみられる渦巻きを中心点が残るものを1個と数えた。

### 1. 2. 殻と蓋の計測

#### 1. 2. 1. 殻の計測

殻径の計測可能な貝殻は、殻口を下にして水平に置き、殻口端部と反対側の体層に直角定規をあて、その最大の値を殻径とした（図1c）。

写真1 ヤコウガイ計測装置



A・B・C：下板（水平面）と垂直になるよう設定した同一線上の3点。

D：下板に平行する上板にかけわたした糸

E：糸の錘

F：セ点

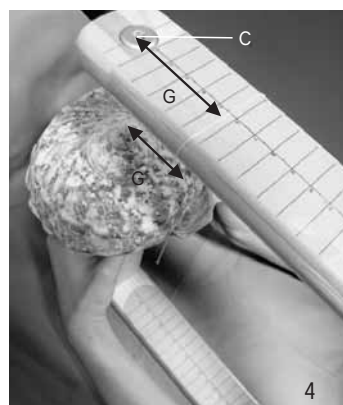
G：セ計測値（距離）

1. 計測装置全体（高さ32cm、幅30cm）

2・3. 計測装置にヤコウガイを置く

ヤコウガイの殻頂をAの下に、臍孔をBの上に置き、Dの糸をF（セ点）に接するように移動させる。

4. 上板を上からみたところ。糸の位置の目盛りはセ計測値を示す。



殻径の計測できない固体については、セ点と殻軸の中心線からの距離（以下セ計測値）（図1 a）を利用した。セ計測値と殻径の長さについてヤコウガイの完全な個体で調べたところ、高い相関のあることが導かれた（木下2006）。そこで両者の関係を示す回帰式を求め、これにもとづいて殻径の復元を行うことにし、破損したヤコウガイについては可能な限りセ計測値を求めた。さいわいほとんどの破片にセ点がこのさされていたこと、殻軸が破損していても割れ面の観察から殻軸の中心線の位置を容易に特定できたことから、多くの個体においてセ計測値を得ることができた。なお計測をすすめる中で、セ計測値をはかるための簡単な装置を作成した（写真1）<sup>(4)</sup>。

### 1. 2. 2. 蓋の計測

蓋は、分厚い方を上にして置き、渦の中心を通る横方向の線で最大の長さを計測した（図1 d）<sup>(5)</sup>。

### 1. 3. 殻と蓋による殻径の復元

#### 1. 3. 1. 殻による大きさ（殻径）復元

同一遺跡出土のヤコウガイを、殻径を保つ貝殻とそうでない貝殻に分け、前者については殻径を計測し、後者についてはセ計測値から貝殻本体の殻径を求めた。セ計測値と殻径の直線回帰式を求めるにあたり、最初は琉球列島産の大小の現生貝の計測値から回帰式をもとめたが、これを遺跡出土のヤコウガイにもどして実際の値と比較したところ誤差の大きいことがわかった。その後遺跡出土のヤコウガイで同様のことを行い誤差がかなり解消されたため、この方法で殻径復元をおこなう方法に改めた<sup>(6)</sup>（木下2006、2007）。

#### 1. 3. 2. 蓋による大きさ復元

奄美大島産の大小の現生貝24個を計測して関係式をもとめ、これに基づいて貝殻の大きさを復元した。蓋の復元については遺跡出土資料に依拠することはできなかった。遺跡では殻と蓋がばらばらに出土するため、殻と蓋の本来の組合せを復元できないからである。

### 1. 4. 遺跡出土のヤコウガイ個体数

殻と蓋から導いたヤコウガイ本体の大きさを、殻径2 cmごとのグループにわけ<sup>(7)</sup>、出土頻度を整理した。殻と蓋は本来組み合うものなので、遺跡で出土する両者の数は同数であることが予想される。したがって例えば殻径が15.1~17.0cmの範囲で蓋20個・殻25個が出土した場合、この大きさのヤコウガイの出土数は25個となる。他の大きさについてもそれぞれ同様に個体数を求め、これらを合計して遺跡における出土個体数とした。

## 2. 遺跡におけるヤコウガイ消費の実態

縄文時代から古代におけるについて、ヤコウガイの消費状況を具体的に示していこう。とりあげる7遺跡のうち6遺跡は美大島北部の海岸に位置し、他の1遺跡は笠利半島の東南約20kmをへだてた喜界島にある。これらは大きくみると同一地域の遺跡とみていいだろう<sup>(8)</sup>。

### 2. 1. 下山田II遺跡

#### 2. 1. 1. 遺跡の概要

本遺跡は、太平洋に面した標高6~8 mの砂丘に形成されており、新期砂丘のうち陸側にある古い

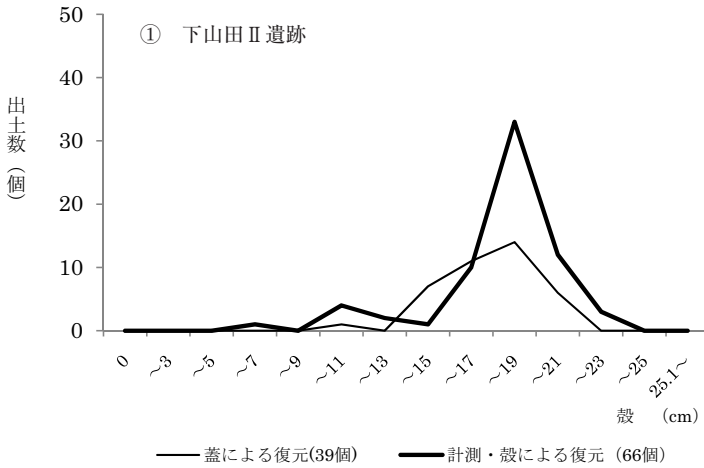


図2 ヤコウガイの大きさ分布①

砂丘（旧砂丘）に包含された生活跡である。遺跡の東側には大きなサンゴ礁が展開する。対象とするのは、1974年～75年奄美新空港の建設に伴う道路改良により実施された鹿児島県教育委員会による緊急発掘調査で出土した資料である（長野ほか1988）。遺跡では砂層上に20基の集積遺構が確認され、中には石床炉のようなものもあり明確な生活面が認められた。ここからは曾畑式・神野B式・面縄前庭式・嘉徳I式・面縄東洞式など縄文前期から後期に至る土器が地点を

異にして見つかっている。全体として面縄前庭式・嘉徳I式・II式が多く、縄文中期～後期を中心とした遺跡とみていいだろう。

鹿児島県埋蔵文化財センターに保管されている食料残滓の貝殻をみると、沖縄の貝塚時代後期にみられるものとほとんど同じ種類が揃い、それぞれに大形の個体が多い。ヤコウガイには老成した大形貝が目立ち、蓋には激しく割られた破片が多かった。

2. 1. 2. ヤコウガイ消費

図2の①は下山田II遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。殻径をのこすヤコウガイはなく、大きさはすべてセ計測値からわりだした<sup>(9)</sup>。分析結果は縄文中期～後期の消費状況を示しており、以下を指摘できる。

- 1) 殻径17.1～19.0cmに消費のピークがあり、これは殻による復元でも蓋による復元でも同じである。人々は大型のヤコウガイを中心に捕獲していた。
- 2) 遺跡には殻より蓋が多くのこる。

2. 2. 宇宿小学校遺跡

2. 2. 1. 遺跡の概要

本遺跡は、笠利半島中部の太平洋に面した標高5～10mの砂丘に形成されており、海岸から400mほど陸側にはいった旧砂丘上の縄文後・晩期の生活跡である。1992年に熊本大学によって調査され、その後小学校校舎の新築に伴う発掘調査が1998年と2000年、笠利町教育委員会によって実施された（山下1993、奄美考古学会2003）。今回分析対象にするのは後者によって出土した資料である。

遺跡は砂丘にそれぞれ白砂層をはさんだ4枚のクロスナ層を包含し、上から第1文化層～第4文化層とされた。第1文化層では縄文晩期土器と石囲住居跡7基が、第2文化層では縄文後期土器と掘立柱建物跡・人骨・集積9基が、第3文化層では条痕文土器が、第4文化層では条痕文土器と埋葬されたイヌがそれぞれ検出された。今回取り上げるのは表面採集品を含めた第1文化層と第2文化層のヤ

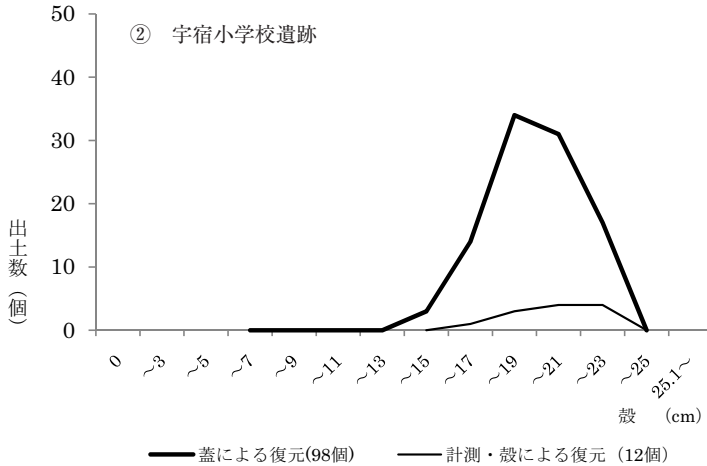


図2 ヤコウガイの大きさ分布②

コウガイである。

### 2. 2. 2. ヤコウガイ消費

図2の②は宇宿小学校遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。ここから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径17.1~19.0cmに消費のピークをもつが、それ以上の大きさの貝も多く捕獲している。
- 2) 遺跡には殻より蓋が格段に多くのこる。

## 2. 3. マツノト遺跡

### 2. 3. 1. 遺跡の概要

本遺跡は、笠利半島中部の太平洋に面した標高6~8mの砂丘に形成されており、新期砂丘のうち海側にある新しい砂丘（新砂丘）に包含された生活跡である。砂丘の北を土盛川が東流して笠利半島東海岸に花弁状に連続する幅広のサンゴ礁に切れ目をつくり、船の通り道を与えている。遺跡の前の海岸を緩やかに囲む岬の海底は、現在もヤコウガイの一大生息地であることが確認されている（中山2000）。

遺跡は砂丘の造成工事の中で1991年発見され、笠利町教育委員会によって緊急発掘調査が行われた（中山1992、中山編2006）。報告書によれば遺跡には白砂層をはさんで2枚の文化層が上下に認められ、上の層は第1文化層、下の層は第2文化層とされた。第1文化層は兼久式土器を主体とする時期の層であるが、9世紀後半から10世紀前半に比定される土師器（池田2005、新里2006）をも包含している。報告書の写真は第1文化層の一部が白砂層を挟んで上下2層になることを示しており、第1文化層が本来2時期を含む層であることがわかる。第1文化層の新旧を区別するために新しい方を第1文化層新相、古い方を同古相と仮称しよう<sup>(10)</sup>。第2文化層は沈線文を施す土器を含み、遺跡における層の広がりも部分的である。また地点を異にして弥生土器に類似した土器が出土しており、白砂層の下にも少なくとも新旧2時期の文化層があるとみられる（中村2006a、2006b）。ヤコウガイは第1文化層と、その下の白砂層に多く認められ、ことに「半島」とよばれる地区に密集していた（中山編2006、p.14）。第1文化層出土試料の<sup>14</sup>C測定では3~7世紀の年代が得られている<sup>(11)</sup>。これは第1文化層の古相に対応する。

### 2. 3. 2. ヤコウガイ消費

図2の③はマツノト遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。ここから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径19.1~21.0cmに消費のピークがあり、非常に大形の貝殻が捕獲されている。
- 2) 人々は殻径21.0cmの大型の貝から殻径3.1cmの小形の貝に至るまで、すべての大きさのヤコウガイ

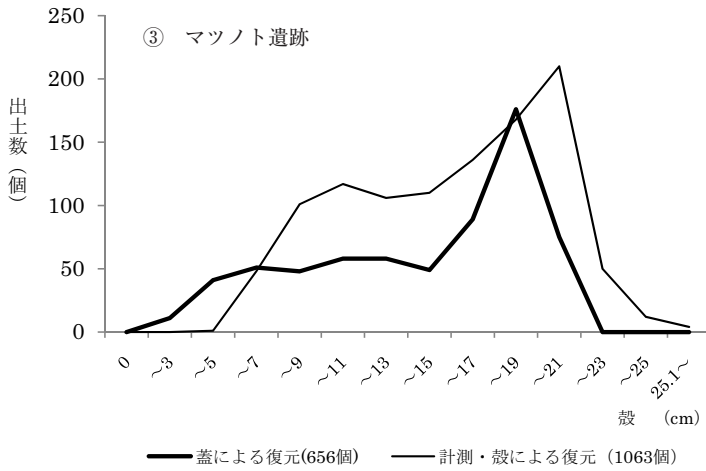


図2 ヤコウガイの大きさ分布③

南北につきでた山の下に広がるサンゴ礁でヤコウガイを採取したのだろう。

遺跡は1996年採砂工事中に発見された。1997年専門学校の拡張工事に伴って、名瀬市教育委員会が2次にわたる緊急発掘調査を実施した結果、遺跡の重要性がひろく認められるようになった。その後範囲確認のための調査などが2001年度まで継続し、遺跡の内容があきらかにされている(高梨編2003、2005、2007)。

遺跡では11~12世紀に比定される文化層の下に兼久式土器期の文化層が認められ、ここで4棟の掘立柱建物跡とヤコウガイ製貝器製作跡、箱式石棺墓1基が確認された。またこの下に、部分的ではあるが兼久式以前の時期の文化層が確認され、本遺跡が少なくとも3時期にわたる複合遺跡であることが了解された。遺物には土器・石器のほか貝符・鉄製釣針・土師器・カムイヤキ陶器・白磁・滑石製石鍋破片などがあり、ヤコウガイは兼久式の層に伴って出土している。小稿ではヤコウガイが集中的にでた第1次・第2次調査区(調査区11と調査区3・12)を対象に分析を行うことにする。

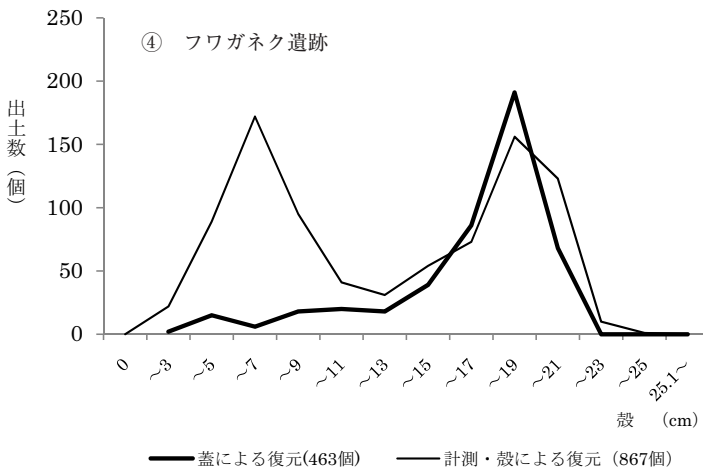


図2 ヤコウガイの大きさ分布④

イをほぼ満遍なく捕獲している。

3) 遺跡には蓋より殻が多いのこる。

## 2. 4. 小湊フワガネク遺跡

### 2. 4. 1. 遺跡の概要

本遺跡は奄美大島東部南海岸にあり、太平洋に面した標高8~10mの新时期砂丘上に形成された生活遺跡である。遺跡は大川が東流して小湊の湾に注ぐ出口に堆積した海岸砂丘上にあり、眼前に良港な入り江を備えている。フワガネク人は湾の外に出、

南北につきでた山の下に広がるサンゴ礁でヤコウガイを採取したのだろう。

第1次・第2次調査区出土試料の<sup>14</sup>C測定では、4~7世紀の年代が得られている<sup>(12)</sup>。

## 2. 4. 2. ヤコウガイ消費

図2の④は小湊フワガネク遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。ここから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイには殻径17.1~19.0cmと殻径5.1~7.0cmの二つの大きさに消費のピークがある。径19.1~21.0cmの殻数も多い。
- 2) 遺跡にのこるヤコウガイの在り方が、大型と小型で対照的である。大型では殻と蓋の数が近似するのに対し、小形のものでは殻が多く蓋はわずかである。

## 2. 5. 用見崎遺跡

### 2. 5. 1. 遺跡の概要

奄美大島笠利半島北端の太平洋側には南北にのびる海岸砂丘（長浜）がある。本遺跡はその北端の岬から1.2km南の地に形成された生活跡である。1994年この地を管理する長島商事が砂丘地の開発を企画したことから、笠利町教育委員会がその事前調査をおこない（中山編1995）、遺跡の内容が明らかになった。その後熊本大学文学部考古学研究室が3年にわたって発掘調査を行った（山田・原田編1996、若杉・尾上編1997、若杉編1998）。

遺跡では新期砂丘が海と並行に跛行的に重なり、その境目に上面幅3.2m深さ1.4mの人工的なU字形溝が認められた。この溝を境に西側（山側）と東側（海側）に様相を異にする兼久式期の生活面が認められ、東側にはやや不明瞭ながら掘立柱住居とみられる遺構が検出された。溝の東西で出土する兼久式土器はよく似ており、一連の遺構面とみられる。遺物には土器・石器・貝錘・貝符などがある。ヤコウガイは東側の包含層（3層）に集中していた。

東側包含層（3層）に連続するとみられる西側包含層（VI層）出土炭化材の<sup>14</sup>C測定では6~8世紀の年代が得られた<sup>(13)</sup>。また同じ包含層から初期の形状の特徴をもつ元通宝（初鑄621年）が1枚出ている。

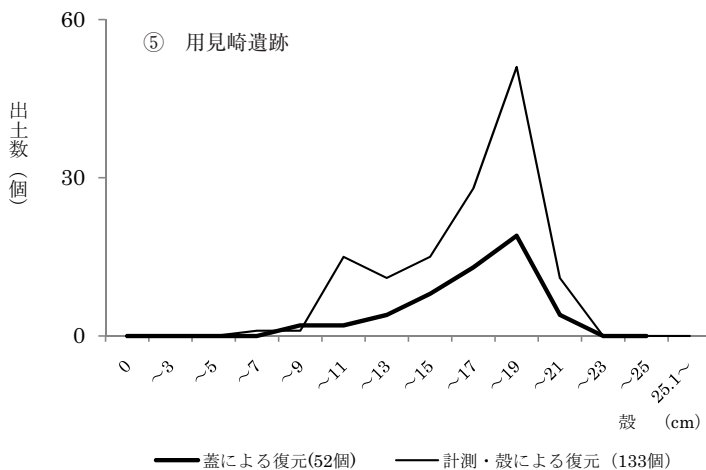


図2 ヤコウガイの大きさ分布⑤

### 2. 5. 2. ヤコウガイ消費

図2の⑤は用見崎遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。これから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径17.1~19.0cmに消費のピークがある。
- 2) 遺跡にのこる殻の数が蓋の数を大きく上回る。

## 2. 6. 先山遺跡

### 2. 6. 1. 遺跡の概要

本遺跡は喜界島西南に位置し、島の背骨をなす台地を背にサンゴ礁の湾を前にみる標高4~10mの



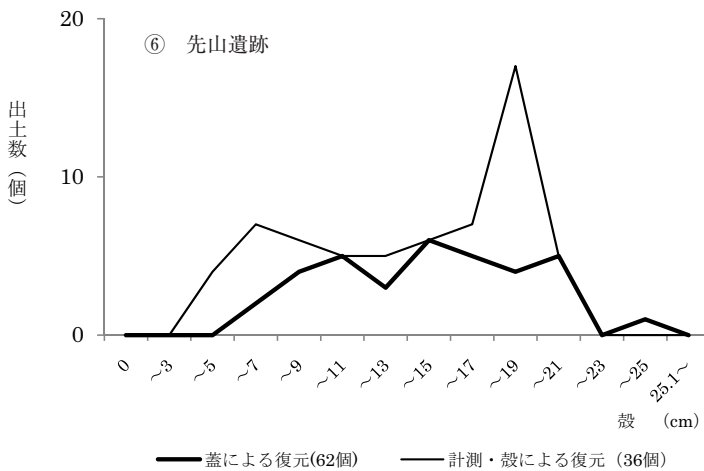


図2 ヤコウガイの大きさ分布⑥

緩やかな傾斜面に広がる。遺跡は現在畑地になっており、耕作土の下は砂丘である。1985～86年、畑地帯総合土地改良事業による事前調査が喜界町教育委員会によっておこなわれ、遺跡の存在が明らかになった(戸崎・長野編1987)。調査は13のトレンチ(4～30.25㎡)によるもので、このうち8・11・12の各トレンチで兼久式土器が出土した。

## 2. 6. 2. ヤコウガイ消費

図2の⑥は先山遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグ

ラフである<sup>(14)</sup>。これから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径17.1～19.0cmに消費のピークがある。
- 2) 殻の数が蓋の数を大きく上回る。
- 3) 人々は大型のほかに小型のヤコウガイも多く捕獲している。

## 2. 7. 安良川遺跡

### 2. 7. 1. 遺跡の概要

奄美大島笠利半島北半部の東海岸では、長さ2kmに及ぶ新期砂丘が南北に二つつながり、干瀬の発達したサンゴ礁とともに特徴的な海岸地形をみせている。北の砂丘は前項2. 4. でのべた長浜砂丘で、その南に続く砂丘には用集落がのっている。この砂丘の南端では背後の山からくだった小河川(安良川)が谷を刻んで海に出、その河口南側に突き出るように標高5mの砂丘が残っている。遺跡はこの砂丘に残された生活跡である。2003年、地権者による畑の土壌入れ替え工事にともなって笠利町教育委員会が遺跡を発掘調査し、その具体的内容があきらかになった(中山編2005 新里2006)。

調査の結果地表下50cmに兼久式期の単純文化層が認められ、サンゴ砂利を敷いた隅円形状プランとこれに伴うとみられる柱穴1基、その他のピット4基、ウニ・ミミガイなどが集中するピットが検出された。土器・石器のほか貝符、鉄製釣針が得られている。兼久式土器は無文化が進んでおり、炭化物による14C年代は、7～8世紀である<sup>(15)</sup>。

### 2. 7. 2. ヤコウガイ消費

図2の⑦は安良川遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである。これから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径7.1～9.0cmに消費のピークがあり、人々は全体に小型のヤコウガイを多く消費している。
- 2) 遺跡にのこるヤコウガイはすべての大きさにおいて蓋の数が殻の数を上回る。

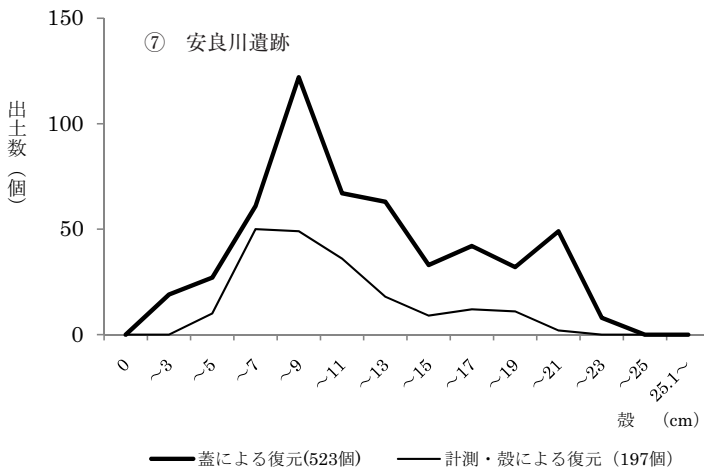


図2 ヤコウガイの大きさ分布⑦

された様子が解明された。すなわち海側の砂丘には古墳時代末期から平安時代併行期の遺跡が包含され、ひとつ山よりの砂丘には弥生時代後期から古墳時代併行期の遺跡が、もっとも山側の砂丘には縄文時代後期の遺跡が含まれる。これらはそれぞれ長浜金久Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡、同Ⅲ遺跡と命名された(弥栄編1985)。先に2. 1. でのべた下山田Ⅱ遺跡は長浜金久Ⅲ遺跡と同列の砂丘に包含されている。

長浜金久Ⅰ遺跡の遺物包含層は地表下50cmで確認された。この層は海側の地山の深いところでは薄い白砂層と互層になった20枚の砂層に分かれ、報告書ではそのうち9・13・19層を文化層としている。そのいずれの層からも兼久式土器が出土している。三つの文化層ではそれぞれに貝殻の集中箇所が合計40数カ所以上検出され、ここ

が各時期の生活面であったことを示している。興味深いのは、この貝殻集積にヤコウガイの加わるのが19層だけという点である<sup>(16)</sup>。遺跡からは土器・石器のほか貝符・貝錘・ヘラ状鉄器・鉄製釣針が出土し、9～10世紀に比定される土師器・黒色土器もみられた。

貝殻による<sup>14</sup>C年代測定の結果、19層では9世紀、13層では11世紀、9層では13世紀の年代が得られている<sup>(17)</sup>。小稿で対象とするのは19層出土のヤコウガイである。

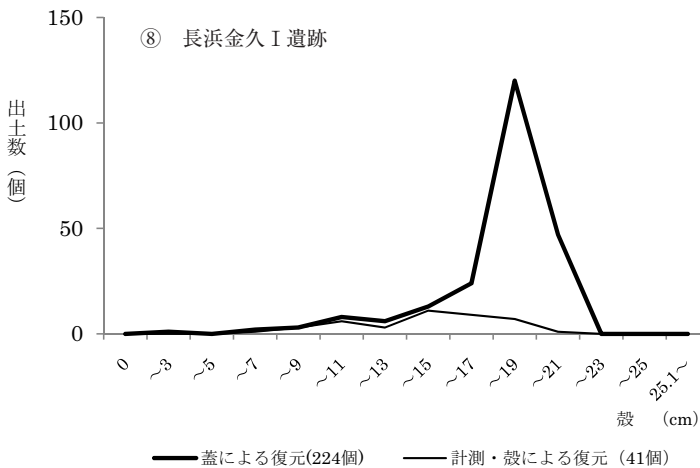


図2 ヤコウガイの大きさ分布⑧

## 2. 8. 2. ヤコウガイ消費

図2の⑧は長浜金久I遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を示すグラフである<sup>(18)</sup>。これから以下を指摘できる。

- 1) ヤコウガイは殻径17.1~19.0cmに消費のピークがある。
- 2) すべての大きさにおいて蓋の数が殻の数を上回り、大形のものではその差が著しい。

## 3. 奄美大島北部におけるヤコウガイ消費の変遷

### 3. 1. 遺跡の先後関係

縄文時代2例、兼久式期6例についてヤコウガイの消費状況をみてきた。ヤコウガイを多く出す遺跡は兼久式期に集中しているが、同じ兼久式土器にも一定の時期幅のあることが、兼久式土器の変化や伴出する遺物（貝符・土師器・黒色土器・開元通宝）、<sup>14</sup>C測定結果からわかる。兼久式土器の时期的細分については、高梨修や中山清美らによる編年研究がある<sup>(19)</sup>。編年について議論の継続している部分もあるが<sup>(20)</sup>、これをいれても小稿にかかわる遺跡の先後関係は以下のように整理される。

下山田II⇒マツノト（第1文化層 古相）・小湊フワガネク（第一次調査区・第二次調査区）⇒見崎遺跡（3層）⇒安良川⇒長浜金久I

このうち喜界島の先山遺跡については、遺跡の时期的位置付けを決定しうる土器の出土数が少なく、三つの小トレンチ出土品を集合させているため、兼久式期内の位置付けを定めることが困難である。分析結果は参考に留めることにしたい。

### 3. 2. ヤコウガイ消費の変遷

表1は対象の8遺跡を整理したものである<sup>(21)</sup>。これをもとに、消費の変遷を、消費量・大きさ・遺跡における残り方の3点において検討しよう。

#### 3. 2. 1. 消費量

遺跡におけるヤコウガイ出土個数の多寡が、そのまま当時の消費状況を反映しているとは限らない。発掘地点や調査面積による違いを考慮しなければならないからである。消費量を遺跡間で比較するために、1㎡あたりの出土個数で消費量の多寡を比較することにした。遺跡出土数と発掘調査面積から平均値をだし比較したのが図3である<sup>(22)</sup>。

図3では、縄文時代の2遺跡と比べて兼久式期の5遺跡においてヤコウガイ消費が激増していることが理解される。この中で特異な数値を示すのが安良川遺跡である。ここではこの点を注意しておこう。

#### 3. 2. 2. 大きさの変遷

図2において、縄文時代の①下山田IIと②宇宿小学校構内遺跡では、グラフの殻径[~13]から[~25]の間に山がある。兼久式期になると⑧長浜金久I遺跡を除くすべての例において山のできる範囲が[~3]から[~25]に拡大し、人々が大型から小型にいたるあらゆる大きさのヤコウガイを捕獲するようになったことがわかる。この傾向は安良川遺跡まで継続するが、兼久式期末の長浜金久Iに至ってみられなくなり、縄文時代と同じ消費傾向を示すようになる。

ヤコウガイ捕獲のピークをみてみよう。縄文時代には捕獲のピークが殻径17.1~19.0cmにあり、兼

表1. 分析対象遺跡一覧

| 遺跡名                        | 所在地      | 遺跡の種類         | 調査年<br>調査面積 (㎡)     | 時期            | ヤコウガイ<br>出土個体数 | <sup>14</sup> C年代 (2σ)・試料   | 文献                            |
|----------------------------|----------|---------------|---------------------|---------------|----------------|---|-------------------------------|
| 1 下山田Ⅱ                     | 奄美市笠利町万屋 | 生活跡           | 1984年～1985年<br>800㎡ | 縄文時代中期<br>～後期 | 73             |   | 長野ほか編1988                     |
| 2 宇宿小学校構内<br>(第1文化層・第2文化層) | 奄美市笠利町宇宿 | 生活跡           | 1999年・2000年<br>403㎡ | 縄文時代後期<br>～晩期 | 99             |   | 奄美考古学研究会2003                  |
| 3 マツノト<br>(第1文化層・古相)       | 奄美市笠利町土盛 | 生活跡           | 1991年・2004年<br>440㎡ | 兼久式期          | 1125           | CalAD420～650・木炭<br>CalAD410～650・木炭<br>CalAD240～620・木炭                                       | 中山1992<br>中山編2006<br>中村2006   |
| 4 小湊フワガネク<br>(第1次調査・第2次調査) | 奄美市小湊    | 生活跡・貝<br>器製作跡 | 1997年<br>563.5㎡     | 兼久式期          | 914            | CalAD450～640・木炭<br>CalAD530～650・木炭<br>CalAD530～650・木炭<br>CalAD440～640・木炭<br>CalAD390～600・木炭 | 高梨編2003<br>高梨編2005<br>高梨編2007 |
| 5 用見崎 (3層)                 | 奄美市笠利町用  | 生活跡           | 1995年・1997年<br>100㎡ | 兼久式期          | 134            | CalAD575～770・木炭*  | 中山編1995<br>若杉編1998            |
| 6 先山                       | 奄美市喜界町   | 生活跡           | 1986年<br>54.3㎡      | 兼久式期          | 63             |   | 戸崎ほか編1987                     |
| 7 安良川                      | 奄美市笠利町用  | 生活跡           | 2003年<br>198㎡       | 兼久式期          | 523            | CalAD660～780・木炭   | 中山編2005                       |
| 8 長浜金久Ⅰ<br>(19層)           | 奄美市笠利町和野 | 生活跡           | 1983年<br>265㎡       | 兼久式期          | 224            | CalAD830～890・貝殻   | 弥栄編1985                       |

※Ⅳ層の数値。3層の時期はこれと同じか新しい。

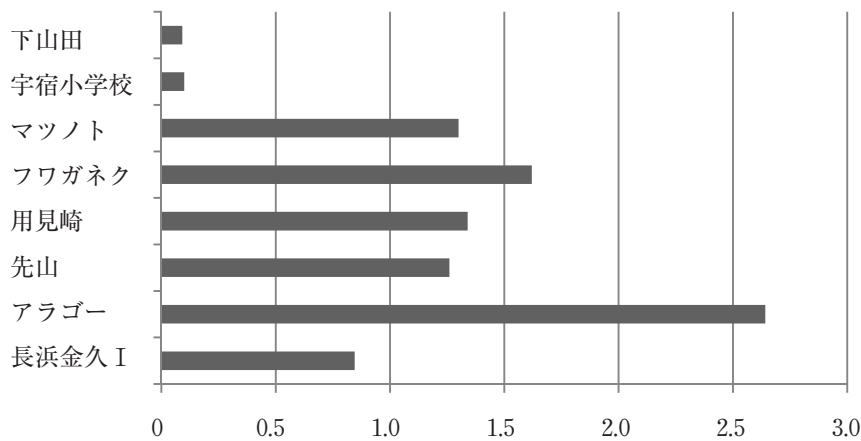


図3 ヤコウガイ出土頻度 (個/㎡)

久式期においても用見崎遺跡まではほぼ同じ大きさにピークをもつ。ただマツノト遺跡では殻径19.1～21.0cmの大きさのものが捕獲のピークを示しており、超大型貝<sup>(23)</sup>への志向が見られる。また兼久式期では小型のヤコウガイにおいても小さなピークのできることが特徴である。ところが安良川遺跡ではピークが殻径7.1～9.0cmに移動し、この時期のヤコウガイ捕獲に大きな変化のあったことが予測される。しかし続く長浜金久Ⅰ遺跡、ピークは殻径17.1～19.0cmに復帰している。

以上の大きさからみた兼久式期のヤコウガイ採取の特徴は、以下の3点にまとめられる。

- ・兼久式期には大型貝に加えて中型・小型貝の捕獲も始まる。
- ・兼久式期には超大型貝捕獲への志向が認められる。
- ・兼久式期後半に捕獲される貝殻が小型化するものの終末期には回復する。

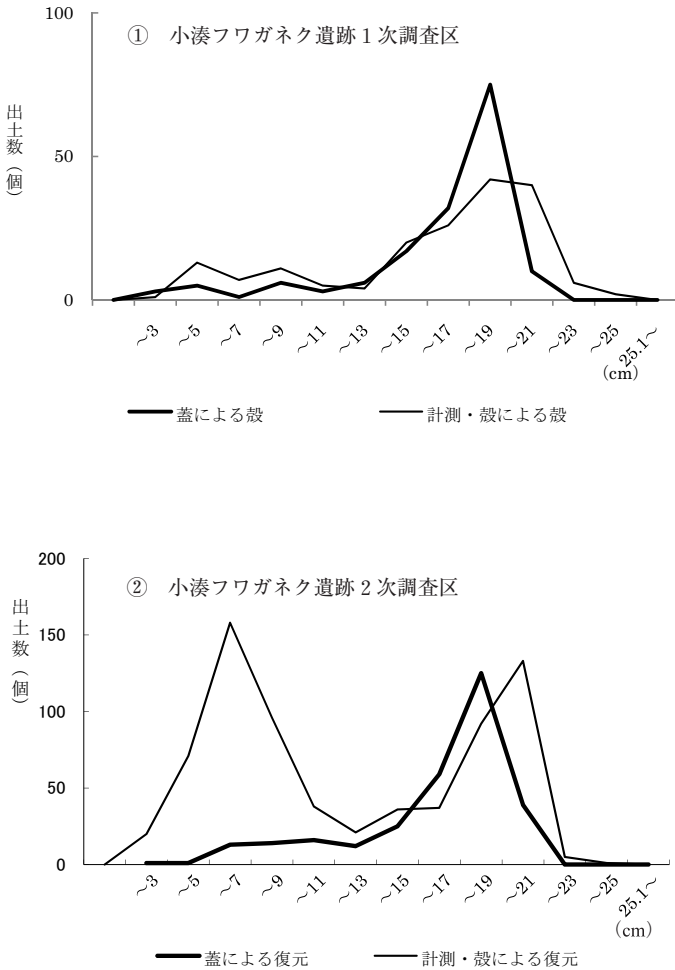


図4 フワガネク出土ヤコウガイの大きさ分布

落まで運ぶことを考えれば、多くのヤコウガイを捕獲した場合、そのいくつかについては海岸で殻を割り蓋のついた身のみを集落に持ち帰ったことが容易に推測される<sup>(28)</sup>。縄文時代の2例(図2①②)はそういう状況を示していると解釈できる。しかし兼久式期になると、遺跡にのこる殻の数が蓋数を上回るようになる。ただその後半では蓋数が殻数をうわまわる安良川の例が登場し、これにつづく長浜金久1でも同じ傾向が続く。

蓋より殻が遺跡に一樣に多くのごされる兼久式期の状況をどう考えればいいのだろうか。縄文時代の消費状況と比較すればこれは通常のことではなく、ヤコウガイの殻を遺跡にのこす何らかの理由が存在したと考えていいだろう。この場合、殻と蓋の数はほぼ同じになるか、殻がさらによそから集められる状況が予測される。後者にあてはまる兼久式期の場合、相当数の貝殻が遺跡にもちこまれていた

小型の貝を捕獲する傾向をもっとも顕著に示すのが④小湊フワガネク遺跡である。これをさらに調査区に分けて示すと図4のようになる。図4①は第一次調査区(調査区11)で、同②は第二次調査区(調査区3・12)出土のヤコウガイの大きさの分布である。①は全体の傾向がマツノト遺跡(図2の③)に共通している。②は小型の貝が突出して多い。両調査区の土器の特徴の共通性や、第一次調査区と第二次調査区出土の土器が接合したことから、報告者は両調査区が同一時期であると述べている。同時期でも場所によって消費傾向の異なることが了解される<sup>(24)</sup>。

### 3. 2. 3. 蓋と殻の残り方

ヤコウガイは第一義的には食料であるから、遺跡に残される蓋の数は食べられた生体の数とみなすことができる<sup>(25)</sup>。したがって遺跡には蓋と同じ数の殻が残されるはずであるが<sup>(26)</sup>、しばしば蓋の数が殻の数より多い。ヤコウガイの殻は重量があるため<sup>(27)</sup>、複数個を海から集

ことになる。すなわちこの時期にヤコウガイ貝殻の需要が高まったことが想定されるのである。

遺跡にのこる蓋と殻の関係は、以下のように整理できる。

- ・遺跡におけるヤコウガイのあり方は、蓋が多く殻の少ないことが常態である。
- ・兼久式期には殻の方が多く遺跡に遺されており、人々は自らの捕獲数を越える貝殻を集落に集めていたとみられる。
- ・兼久式期にはヤコウガイ貝殻の需要が高まったと想定される。
- ・この状況は兼久式期後半の安良川遺跡時に終わり、これ以降蓋数が殻数を再び凌駕する。

### 3. 2. 4. 消費の変遷と画期

兼久式期のヤコウガイ消費は、マツノト遺跡・小湊フワガネク遺跡用見崎遺跡に対応する初めの段階と、用見崎遺跡に対応する中頃の段階、安良川に対応する後半の段階、長浜金久Ⅰ遺跡に対応する終末の段階にわけて理解することができる。これをそれぞれ1～4の段階に整理し、縄文時代の傾向とあわせてまとめると、表2のようになる。

表2における変化の特徴に注意すると、ヤコウガイ消費について三つの画期を認めることができる。第一の画期はヤコウガイが大量に捕獲されるようになる時期【段階1】、第二の画期は兼久式期中で大きさのピーク値が急落する時期【段階3】、第三の画期はこの大きさが回復する時期【段階4】である。これらの期について検討しよう。

表2 奄美地域のヤコウガイ出土状況一覧

| 時 期       | 大きさの<br>ピーク (cm) | 小型貝の捕獲  | 蓋と殻の関係 | 出土頻度<br>(個/㎡) | 対応する<br>図2 番号 | 消費の画期 |       |
|-----------|------------------|---------|--------|---------------|---------------|-------|-------|
| 縄文時代中期～晩期 | 17.1～19          | ほとんどなし  | 蓋>殻    | 0.1           | ① ②           |       |       |
| 兼久式期      | 段階1              | 19.1～21 | 多い     | 蓋<殻           | 1.6～2.6       | ③ ④   | 第一の画期 |
|           | 2                | 17.1～19 | 多い     |               | 1.3           | ⑤     |       |
|           | 3                | 7.1～9   | 多い     | 蓋>殻           | 2.6           | ⑦     | 第二の画期 |
|           | 4                | 17.1～19 | ほとんどなし |               | 0.8           | ⑧     | 第三の画期 |

### 3. 3. ヤコウガイ捕獲史における三つの画期

#### 3. 3. 1. ヤコウガイ大量捕獲のはじまり—第一の画期

いわゆるヤコウガイ大量出土遺跡の登場は、その典型例であるマツノト遺跡と小湊フワガネク遺跡によって示される。二つの遺跡の消費状況を見る限り、人々は小型貝から大型貝までのあらゆる大きさの貝殻を捕獲しており、超大型貝への志向も強い。この中で注目されるのが小型貝の捕獲である。

この現象に早く注目した西野望は、「採集の際目についたものを食糧として捕獲した可能性が高い」としてこれらがまずは食糧であったことを重視する（西野2006、p.198）。高梨修は、小型の貝は小型の有孔製品の素材だとしている（高梨2008、p.217）。いずれも妥当な指摘だと思うが、食糧にしても貝製品にしてもこの時期に小型貝をこれほど捕獲しなければならなかった必然性はどこにあるのだろう。

小型のヤコウガイは浅い部分に生息し、成貝に比べるとはるかに捕獲しやすく、一度に多数の捕獲

が可能だとされる<sup>(29)</sup>。兼久式人も容易に捕獲したのであろうが、これが続くと資源の再生産に影響する。沖縄県の漁業調整規則（第34条）では、ヤコウガイの殻の口径が6cm未満のもの（殻径12～13cm）は資源確保のために捕獲が禁止されている。しかしこの大きさのでも資源の生育になお問題があるとする意見が一方にはある（山口1995、P.70）。殻径12～13cm以下の貝殻の採取は再生産に影響する危険性を孕んでいるとみていい。小湊フワガネク遺跡・マツノト遺跡のヤコウガイ採取状況は明らかにこの危険を犯している。縄文時代人が小型のヤコウガイをほとんど採取していないのは、このことを経験的に知っていたからだろう。

奄美の伝統社会に生きた兼久式人に資源管理の知識がなかったとは思えない。では兼久式人が小型貝を含めたあらゆる大きさのヤコウガイを捕獲し集落に貝殻を集積しているのは何故なのだろう。

西野望は、食用後得られた比較的大きな貝殻を対象に、完全な貝殻と体層をわりとったものについて貝殻の取引が行われていたことを指摘した。ただ具体的な交易地については明言を避けている（西野2006、p.198）。高梨修は小湊フワガネク遺跡の厳密な調査によって、ヤコウガイの集積がヤコウガイ製匙や有孔製品の製作を第一にしたと指摘している（高梨b2008、p.218）。また田中史生と高梨は古代～中世史料にみえるヤコウガイの古称が「ヤクガイ（夜久貝）」であることから、推古朝（593～628）段階にヤコウガイが大和にもたらされていた可能性を指摘し、ヤコウガイの大量捕獲が文献や考古遺物で確認される奄美大島人と大和との接触に関係するのではないかとみている（高梨b2008、p.226、田中2005）。

7世紀の大和におけるヤコウガイ資料はまだみつかっていないが、8世紀になると国産とみられるヤコウガイ製品が中央に登場する（琵琶・帯・琴などの正倉院宝物）。筆者はこれらのうちの帯などを詳細に検討したが、この時期大和にヤコウガイがふんだんに供給された状況を認めることはできなかった。この時期の奄美と大和の接触を否定するのでももちろんないが、ヤコウガイに関する限り、7～8世紀において両者はいまだ定常的な関係に達していなかったと予測している（木下2008）。正倉院宝物と同時期の文書『東大寺献物帳』（756年）がヤコウガイを「斑貝」とのみ記し、9～10世紀の文献にみられるように「夜久貝」（『儀式』『踐祚大嘗祭儀中』）や「夜久之斑貝」（『和名類聚抄』）と表現していないことも、これに関係するのではないだろうか。つまり7～8世紀において奄美のヤコウガイが大和で恒常的に消費された可能性はいまだ高くないと見られるのである。またヤコウガイ大量出土遺跡におけるヤコウガイの破損状況は、匙や有孔製品の製作が大量捕獲と直接関係する確率の低いことを示していた（木下2006）。ではなぜヤコウガイは大量に消費されたのだろうか。これについてかつて筆者は7～10世紀に琉球列島に集中的にみられる開元通宝を根拠に、当時ヤコウガイを大量に消費していた中国との関係を考えてよいのではないかと推論した（木下2000）。ただヤコウガイが産地にこれほど遺される状況は、どちらの推論においても、この行為があまり効率のいいものではなかったことを示唆する。

### 3. 3. 2. 捕獲圧の顕在化—第二の画期

安良川遺跡（図2の⑦）では全体にヤコウガイの大きさが著しく小型化している。これを人々が小型の貝を好んで捕獲した結果とみることも可能だが、大きさの分布状況は小型貝への収斂性を欠いている。むしろこれ以前の時期に小型の貝を集中的・継続的に捕獲したことが捕獲圧となってヤコウガイの大きさに表れたとみるのが自然であろう。

この時期は大きさだけでなく、遺跡にのこる蓋と殻の関係が縄文時代と同様の関係にもどっていることでも注目される。しかしその出土量では、兼久式期でもっとも高い頻度を示しており、依然として兼久式期特有の高い捕獲率を維持する。兼久式期【段階1】に始まる一連のヤコウガイ大量捕獲は、資源の委縮を招くに至り、この時期ようやく収束する。

### 3. 3. 3. 大和のヤコウガイ消費—第三の画期

長浜金久I遺跡ではヤコウガイ消費が正常なパターンに復帰したことを思わせる大きさの分布を示している(図2の⑧)。この時期にはヤコウガイの生息数が回復したとみていいだろう。

長浜金久I遺跡の19層の時期は同一層出土の土師器から9~10世紀に比定される。おりしもこの時期(9世紀後半以後)は大和の文献にヤコウガイが「夜久貝」「夜久之斑貝」「やく貝」「益救貝」などとしてさかんに登場し(小島1990、山里1995・1999)、本土産の文物が南島に頻繁に登場する時期に対応している(池田2005)。その後、南島産ヤコウガイの豊富な供給を背景に日本の漆螺鈿技術は進展し、工芸品として完成度を高めてゆく。11世紀から12世紀、浄土思想の流行によって寺院の室内装飾において来迎の光の表現が重要になり、これを満たす素材として金とともに螺鈿が使用されるようになる、それまでとは比べものにならぬほど大量のヤコウガイ消費が実現する<sup>(30)</sup>。11世紀後半以降1世紀あまりの間、南島はいわゆるヤコウガイ交易の盛期を迎えることになる(木下2002、高梨2006)。

長浜金久I遺跡19層はまさにそういう時期に対応する(高梨2008、pp.226~227)。ヤコウガイが効率よく遺跡から持ち出されたためであろうか、遺跡に遺るヤコウガイ数はあまり多くない。また蓋の数にたいして殻の数が極端に少ない。このことは殻のみが遺跡から持ち出されたという解釈を可能にするかもしれない。しかし今のところ同時期の遺跡は本例のみなので、今後複数の遺跡による検討が必要になるだろう。

注意したいのは、長浜金久I遺跡のより新しい時期である13層・9層にヤコウガイがほとんどみられない点である。殻は持ち出されても蓋は遺っていないはずであるがそれも見られない。この時期は<sup>14</sup>C年代ではそれぞれ11世紀と13世紀に対応し、この値に海洋リザーバー効果による誤差があるとみてもいわゆるヤコウガイ交易の盛期に対応する可能性は高い。兼久式期において認められたヤコウガイ大量出土遺跡の一連の在り方が、9~10世紀を境に変化することと合わせて今後検討すべき課題である。

## 4. まとめと今後の課題

- 奄美大島北部において、先史時代人は大型ヤコウガイ(殻径17.1~19.0cm)を捕獲対象にしていた。
- 兼久式期(6~7世紀)になると、人々のヤコウガイ消費に共通した変化がおこる。小型ヤコウガイと超大型ヤコウガイの捕獲が始まり、ヤコウガイにたいする無差別の捕獲と、大量の殻の集積が始まる(第一の画期)。この背景に島外における貝殻消費が想定されるが、遺跡にのこされた大量の貝殻はその供給の効率の悪さを示唆する。
- 兼久式期の後半(8世紀頃)にヤコウガイは小型のもの(殻径7.1~9.0cm)が捕獲されるようになり、資源の委縮した状況が認められる(第二の画期)。



- 兼久式期の終末期（9～10世紀）にはヤコウガイ資源が回復し、通常の捕獲が行われる。当期は大和で南島のヤコウガイが消費される時期にあっており、遺跡もこれに対応していた可能性が高い（第三の画期）。この時期の長浜金久 I 遺跡に大型ヤコウガイの殻がほとんど残されていないのは、こうした交易品として搬出されたと解釈できるかもしれないが、蓋も遺っていない事実については今後の検討が必要である。
- 長浜金久 I 遺跡で認められた11世紀、13世紀とみられる文化層にはヤコウガイがほとんど検出されなかった。おりしもこの時期は大和と南島のヤコウガイ交易の最盛期である。古代・中世のヤコウガイ交易の実態を、生産地において改めて検討する必要があるだろう。

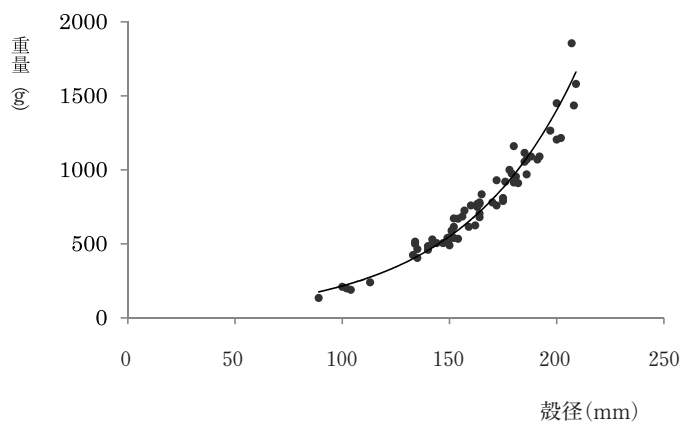
## 注

- (1) 先史時代の早い時期（爪形文土器期）の遺跡である野国貝塚群B地点（沖縄県嘉手納町  $^{14}\text{C}$ 年代：Cal BP6070 $\pm$ 145～Cal BP5950 $\pm$ 90）や、同時期の新城下原第二遺跡（沖縄県宜野湾市・北谷町  $^{14}\text{C}$ 年代：Cal BP6077 $\pm$ 52）で一定量のヤコウガイが出土している（岸本ほか1984、片桐ほか2006）。
- (2) この部分の名称が貝類学でとくに定められていないようなので、接点という意味でセ点とした。
- (3) セ点を選んだのは、この部位がヤコウガイで場所を特定しやすく唯一の部分であること、セ点の強度が比較的大きいため残存しやすいこと、またセ点は密着する体層端部が剥落してもその痕跡を留めることが多く、計測点の特定が容易であることによる。
- (4) セ計測値の計測は、簡単な装置によっておこなった（写真1）。計測装置では、ヤコウガイの臍孔と殻頂が同一線上にくるように貝殻を固定し、この線を計測の基準線としてここからセ計測値を計れるようにした。
- (5) 蓋の多くは遺跡人がこれを利器として使用したために外縁の一部が欠損し、その欠損が計測部分に及ぶこともしばしばであった。しかし欠損は全体形状から本来の形を容易に推測できる程度のものであったため、記録では完全な例と標記を区別して推定復元値を記入した。推定される欠損幅はほとんどの場合1～2mmである。欠損幅がこれ以上のものについては計測対象から除外した。
- (6) つまり、遺跡出土の完全なヤコウガイを対象に殻径とセ計測値の回帰式をもとめ、これをもとに貝殻破片のセ計測値から殻径を復元した。ただこの方法だと遺跡ごとに回帰式を求めなければならず、また回帰式を求めるに足るヤコウガイ出土数が必要になり、どの遺跡でも可能というわけにはいかないが、復元径の正確さは増す。
- (7) ヤコウガイのセ計測値と殻径値の対応にはかなりの変異がある。奄美大島マツノト遺跡出土のヤコウガイ363個について調べたところ、同じセ計測値でもこれに対応する殻径は平均22mmの変異をもっていた。殻径の復元はこの変異の平均値に復元されているであろうことをふまえると、復元値の前後に11mmずつの変異幅をもたせることが必要となる。頻度分布を2cmごとにしたのはこのためである。
- (8) 同じ地域について、「喜界島・奄美大島勢力圏」が提唱されている（高梨2005、p.209）。これは11世紀の直前に倭人の拠点集落が喜界島に形成され、笠利半島東部と喜界島を含めた地域に政治的勢力圏が登場していた可能性を示す政治的・経済的範囲である。ここでいう文化圏はこうしたまとまりを想定したものではなく、遺跡をあつかう上での便宜的なものである。
- (9) セ計測値によるヤコウガイの殻径復元は、回帰式を独自に求めるに足る資料が得られなかったので、近くのマツノト遺跡で求めた回帰式を使用した。

- (10) 遺跡の南側に「第1文化層の上にも白砂層を挟んだ薄いクロスナ層が確認され、北側に緩やかに傾斜し、第1文化層のクロスナと一緒になる」(中山編2006、p.14)。ただこの上下2層が、仮称した新相と古相にそのまま対応するかどうかは不明である。
- (11) CalAD420~650(木炭 1991年調査第1文化層 2 $\sigma$ )、CalAD410~650(木炭 2004年調査I層 2 $\sigma$ )、CalAD240~620(木炭 2004年調査I層 2 $\sigma$ )。木下2006 pp.227~229による。
- (12) CalBP1650 $\pm$ 40(2次調査A6グリッド ヤコウガイ内炭化材)、AD390~600(炭化材 KFSIB-3 2 $\sigma$ )、CalAD530~650(炭化材 KFSIB-6 2 $\sigma$ )、CalAD530~650(炭化材 KFSIB-8 2 $\sigma$ )、AD440~640(炭化材 KFSIF-5 2 $\sigma$ )。高梨編2005 pp.149~154による。
- (13) CalAD575~770(炭化材 VI層 2 $\sigma$ ) (若杉竜太ほか 1997)
- (14) セ計測値によるヤコウガイの殻径復元は、回帰式を独自に求めるに足る資料が得られなかったので、小湊フワガネク遺跡で求めた回帰式を使用した。
- (15) CalAD660~780(炭化材 2 $\sigma$ )。調査時採取した試料を地球科学研究所が分析したもの。木下2006の研究の一環としておこなったが、測定に時間を要し結果を報告書に反映できなかった。
- (16) 9層では炭粉をとまなうマガキガイ約140個が2箇所集中しており、13層では一部にオニノツノガイを含むマガキガイの集中が35箇所検出された。19層ではこれらにヤコウガイやシャコガイサラサバタイなど大形貝類を含む貝殻の集中箇所がみられ、また別にアマオブネの集中もあったとされる。
- (17) 調査者の弥栄久志氏によると、試料はすべてマガキガイであったという。液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定により、以下の結果が報告されている。19層：CalAD830~890、13層：CalAD1020~1050、9層：CalAD1240~1290。これらについては海洋リザーバー効果を考慮する必要があり、実際にはこれより若干あたらしい年代になる可能性を考えておく必要がある。海洋リザーバー効果とは、海洋表層付近の水が古い炭素を含む深層水の影響で若干古い年代となっており、これが海産物の<sup>14</sup>C年代調査に影響を与えることをいう。
- (18) セ計測値によるヤコウガイの殻径復元は、回帰式を独自に求めるに足る資料が得られなかったので、時期的に近い安良川遺跡で求めた回帰式を使用した。
- (19) 兼久式土器編年をあつかったものに以下の文献がある。高梨1993、1995、1999、2000、2004、2005a、2005、中山2005、2006、中山編2008、中村2006。
- (20) 木下編2006、高梨2007、2008。
- (21) 発掘調査面積を、報告書のグリッド図面から計算したので、各遺跡報告書の記述と異なる部分がある。
- (22) 宇宿小学校構内遺跡とマツノト遺跡では、2枚の文化層でヤコウガイが認められているので、2倍の調査面積で計算した。遺跡出土のヤコウガイの最小個体数は、大きさごとに殻と蓋の出土数を比較して数値の大きい方をとり、合計して求めた。このことについて、筆者はかつて、ヤコウガイ大量出土遺跡の出土頻度を今回より多くみつもっていたが(木下2006、pp.213~217)、今回計算方法を改めたことに伴い前回までの数値を今回の数値に改めることにする。
- (23) ヤコウガイ殻径の分布頻度にもとづき、以下のように分類した(木下2007)
- 大型：殻径17.1cm以上のヤコウガイ(殻径19.1cm以上を超大型とする)
  - 小型：殻径9.0cm以下のヤコウガイ
  - 中型：大型と小型の中間の大きさのヤコウガイ
- (24) 第一次調査(調査区11)・第二次調査(調査区3・12)ともに貝匙・有孔製品の製作跡とされる。
- (25) 蓋が一定の価値をもって遺跡間を移動させられる可能性は、ヤコウガイ蓋の使用状況等からみて

きわめて低いとみていい（木下2006、pp.206～207）。

- (26) ヤコウガイにはときどきヤドカリのはいった痕跡をのこす殻頂部破片がある。したがって貝殻の個数を数える場合はヤドカリによって遺跡にもたらされた貝殻のあったことを考慮にいれなければならない。また同様にヤドカリによって持ち出された貝殻もあったとみななければならない。用見崎遺跡では、7%に宿貝であったことを示す痕跡が認められた。
- (27) ヤコウガイの殻のみの重さは、小型で100g前後、中型で1000g未満、大形で1500g未満、超大型では2000gをはかる。これに蓋や身の重さが加わるとかなりの重量になる。下図参照。



参考図 奄美大島産ヤコウガイ殻の大きさと重さ (n:64)

- (28) 沖縄のサンゴ礁の干瀬で、敲石や凹石の採集された例が報告されている。（知名1979）
- (29) 渡久地健2009pp.76～77。筆者も同じ内容の話聞いたことがある。
- (30) 昭和42年に岩手県中尊寺金堂の修復がおこなわれた際、特大の沖縄産ヤコウガイ600個が取り寄せられている。この作業にもとづき創建当時には大小約3万個のヤコウガイが消費されたと推定されている（中尊寺宝物館解説による）。貴族社会に荘厳をつくした阿弥陀堂を建立することが流行した11世紀から12世紀、ヤコウガイの消費量は膨大なものだったことが、この1例からも推定される。

## 文献

- 奄美考古学会 2003 「(特集) 宇宿小学校構内遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第5号、奄美考古学研究会
- 池田榮史 2005 「兼久式土器に伴出する外来土器の系譜と年代」『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群 I』学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書、名瀬市文化財叢書7、名瀬市教育委員会、pp.134～148
- 奥谷喬司編著 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版局
- 片桐千亜紀ほか 2006 『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集
- 岸本義彦ほか 1984 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第57集
- 木下尚子 2000 「開元通宝とヤコウガイ」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会pp.187～219
- 2003 「正倉院と夜光貝」『文学部論叢』第78号歴史学編、pp.83～106

- 2006 「ヤコウガイ交易の可能性——6～8世紀の奄美大島3遺跡の分析に——」『先史琉球の生業と交易2——奄美・沖縄の発掘調査から——』平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)報告書、熊本大学文学部、pp.201～220
- 2007 「ヤコウガイ大量出土遺跡の検討——6～8世紀奄美大島の4遺跡を対象に——」『文学部論叢』第93号 歴史編、pp.1～22、熊本大学文学部
- 2008 「正倉院伝来の貝製品と貝殻——ヤコウガイを中心に」『正倉院紀要』第31号、pp.37～60
- 小島瓊禮 1990 「海上の道と隼人文化」『海と列島文化』5、小学館、pp.139～194
- 新里亮人 2006 「琉球列島出土土師器、須恵器の基礎的研究——マツノト遺跡出土土師器の検討——」『先史琉球器の生業と交易2』熊本大学文学部、pp.179～185
- 2006 「安良川遺跡の概要」『先史琉球の生業と交易2——奄美・沖縄の発掘調査から——』平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)報告書、熊本大学文学部、pp.17～21
- 高梨修 1993 「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基本方針」『法政考古学』第20集、pp.167～179
- 1998 「名瀬市小湊・フワガネク(外金久)遺跡の発掘調査」『鹿児島県考古学会研究発表資料——平成10年度——』鹿児島県考古学会
- 1995 「マツノト遺跡出土の土器と編年」『シンポジウム よみがえる古代の奄美』資料集 同シンポジウム実行委員会
- 1999 「いわゆる兼久式土器と名瀬市小湊フワガネク(外金久)遺跡出土土器の比較検討」『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流』奄美博物館シンポジウム資料集、pp.19～40
- 2000 「いわゆる兼久式土器と土盛マツノト遺跡出土土器の比較検討」『奄美博物館研究紀要』第5号、名瀬市立奄美博物館、pp.30～45
- 2004 「奄美諸島の土器」『考古資料大観』12、小学館、pp.197～202 高梨修編2001 『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書四、名瀬市教育委員会
- 2005 「小湊フワガネク遺跡群第一次調査・第二次調査出土土器の分類と編年」『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書、名瀬市文化財叢書七、名瀬市教育委員会、pp.91～134
- 2006 「古代～中世におけるヤコウガイの流通」『鎌倉時代の考古学』高志書院、pp.201～216
- 2007 「『南島』の歴史的段階—兼久式土器遺跡の再検討」『東アジアの古代文化』130号、大和書房、pp.53～81
- 2008a 「古代併行期における奄美諸島の在地土器編年」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』高志書院、pp.257～284
- 2008b 「ヤコウガイ交易——琉球弧と古代国家」『日琉交易の黎明——ヤマトからの衝撃』森話社、pp.209～235
- 高梨修編 2003 『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群 遺跡範囲確認調査 報告書』名瀬市文化財叢書四、名瀬市教育委員会
- 2005 『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書、名瀬市文化財叢書七、名瀬市教育委員会
- 2007 『奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ』学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書、奄美市文化財調査報告書一、奄美市教育委員会
- 田中史生 2005 「7～11世紀の奄美・沖縄諸島と国際社会——交流が生み出す地域——」『自然・人間・社会』第38号、関東学院大学経済学部教養学会、pp.55～73

- 2008「古代の奄美・沖縄諸島と国際社会」『古代中世の境界領域——キカイガシマの世界——』高志書院、pp.49～70
- 知名定順 1979「沖縄本島糸満市名城海岸リーフ採取の石器について」『花綏』創刊号、沖縄国際大学考古学研究会O.B.会、pp.3～20
- 渡久地健 2009「第6章 大和村・サンゴ礁の漁を語る」『聞き書き・島の生活誌②ソテツは恩人』盛口満・安溪貴子編、ボーダーインク、pp.71～86
- 戸崎勝洋・長野真一編 1987『先山遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)、鹿児島県大島郡喜界町教育委員会
- 長野真一・山畑泰子編 1988『龍郷—新奄美空港線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下山田Ⅱ・和野トフル墓』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(45)、鹿児島県教育委員会
- 中村友昭 2006a「マツノト遺跡2004の概要」『先史琉球器の生業と交易2』熊本大学文学部、pp.22～28
- 2006b「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」『先史琉球器の生業と交易2』熊本大学文学部、pp.157～169
- 2006「第4章 平成16年度層位確認調査の成果」『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28集、笠利町教育委員会、pp.200～206
- 中山清美 1992「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号、奄美考古学会
- 1996「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』第4号、奄美考古学会
- 2000「夜光貝の生息する珊瑚礁」『琉球・東アジアの人と文化(上巻)』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp.175～186
- 2005「安良川遺跡における兼久式土器の型式分類」『鹿児島考古』第39号、鹿児島県考古学会、pp.62～81
- 2006「兼久式土器土器の研究(1)」『鹿児島考古』第40号、鹿児島県考古学会、pp.92～111
- 2008「マツノト遺跡にける兼久式土器の編年基準」『南島考古』no.27、沖縄考古学会、pp.1～22
- 中山清美編 1995『用見崎遺跡——長島植物園開発に伴う遺跡確認調査——』笠利町文化財報告第20号、鹿児島県笠利町教育委員会
- 2005『安良川遺跡』笠利町文化財報告書第27号、鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28集、鹿児島県笠利町教育委員会
- 弥栄久志編 1985『新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書 長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)、鹿児島県教育委員会
- 山口正士 1995「13. ヤコウガイ」『日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ)』分冊 I.軟体動物、日本水産資源保護協会、pp.66～72
- 山里純一 1995「南島赤木の貢進・交易」『古代王権と交流 西海と南島の生活・文化』名著出版、pp.299～322
- 1999「夜光貝と檳榔の交易」『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、pp.170～186
- 山下志保編 1993『宇宿小学校遺跡』研究室活動報告28、熊本大学文学部考古学研究室
- 山田康弘・原田範昭編 1996『用見崎遺跡』研究室活動報告31、熊本大学文学部考古学研究室
- 若杉竜太・尾上博一 1997『用見崎遺跡Ⅲ』研究室活動報告32、熊本大学文学部考古学研究室
- 若杉あずさ 1998「I 用見崎遺跡Ⅳ」『考古学研究室報告 第33集』熊本大学文学部考古学研究室